君は僕の輝ける星。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君は僕の輝ける星。

【Ｎコード】
Ｎ４４７６Ｙ

【作者名】
乾　弘毅

【あらすじ】
佐倉遥は中学1年生。
お年頃になりつつある彼女の身辺では、にわかに恋愛方面の世界が広がりつつあるようだけど、当の本人はまだ子供なのでよくわかりません。
それでも、なんだかんだとたったひとつの輝ける星を見つけちゃうかも、というお話です。

1。あくまで斉藤さんの意見だったんですけど

5月もそろそろ終わりのある日に斉藤さんが言いました。
「恋愛するためには、告白されたらその気がなくてもまず付き合ってみるっていうのも良い方法だよねっ」

斉藤さんは中学に入って最初にできた友達。明るくて社交的で、恋バナをオカズにお弁当を食べるのがだぁい好きな13才。
ちなみに4月生まれなんだって。
昼休みは私と斉藤さん、早川さん、荒井さん、中山さん、山下さんの6人でお弁当を食べるのだけど、話題はたいてい恋バナ。
同じく恋バナ大好物の早川さんと学校内の格好良い男子の話で盛り上ったり、荒井さんが調べてきた彼らの成績や所属している部活の情報を聞いたりするのが定番のスタイル。
中山さんは大人しいながらも時々エスプリの聞いた合いの手（「つまり角谷先輩はエロなのね」）とかをサラっと入れ、山下さんは真面目に正論（「中学生で浮気とかってありえないし」）を言う。
私はそんなみんなを眺めながら、（みんな元気でかわいいなぁ）、とオバハンのように満足したりして。
恋愛とかってまだまだ自分のこととしてはピンとこないけど、「うんうん」って話を聞くのはすごく楽しかったから。

少女マンガから韓ドラ昼ドラまで幅広い耳知識をお持ちの斉藤さんが「レッツチャレンジ！何がきっかけで恋が生まれるかはわからないのだ！アーユーレディ？」と鼻息荒く突き立てた指に、「イエース」みんなと一緒に手を重ねた。

「佐倉が好きなんだ。俺と付き合ってほしい」
まさか1時間後に告白されるとも思ってなかったし。

…ね。

キラキラした斉藤さんたちの視線を嫌というほど感じつつ、佐倉遥はカビーンと固まったのであった。

2。お兄ちゃんと賢太と

雨が降りそうなのに傘を持たずに学校に来てしまった。
入れてあったつもりの折りたたみ傘を忘れたのに気づいたのは、今朝別れ際にお兄ちゃんに確認するように言われたからだった。

「今日明日は部活なしだったな。ちょっと待たせることになるけど、帰り雨だったら迎えに行くから待ってろ」
そう言ったのはお兄ちゃん。
そして、
「良いなぁ。遥ちゃんは大切にされて」
そう言ったのはお兄ちゃんの彼女。

お兄ちゃんの通う高校は私の通っている中学のすぐ近くにあって、ホントはお兄ちゃんはもっと遅い時間に登校できるんだけど、心配性のお父さんのいいつけで毎朝私と一緒に登校してくれている。
登校時間が早いから、私の友達が一緒の事はあっても、お兄ちゃんの連れが一緒のことはめったにない。
なのになぜか、偶然にも、ばったりあって一緒に登校してきたのだ。

今日あったばかりなのになんですが、たぶん二人はもう終わりかけているんだと思う。
彼女の言葉にお兄ちゃんがいちいちイラっときてるのがその証拠。
たしかに、ねっとりと甘い媚びの効いた彼女の声は、無関係の私が聞いてもうんざりする。
でもだったら最初から付き合わなきゃ良いのに、と思うのは私が子供だから？
振り回されるのはイヤだ、と思う。
お兄ちゃんと彼女の関係に。それから彼女の揺れ動く乙女心とかそ

ういうのに。
優しそうなふりで、でも私が邪魔だとアピールしてくるあのエグイ乙女心。
はやく別れてしまえ、と悪魔のようなことを考えながら降り止まない雨に溜息をついた。

「遥」
迎えに来たのは賢太だった。
予想通り、というか、お兄ちゃんは来ないらしい。
「お兄ちゃんは彼女と一緒なんだね」
「まあ、あいつもイロイロと大変なんだよ」
わかってやりなさい。と賢太が傘を差し出した。
…そういう大人発言キライ。
「賢太は、傘、私が一緒に入るとめんどくさいこと言い出す彼女とかいない？」
少しささくれた気持ちで確認する。
賢太はちょっと驚いたように目を開いて
「そんなこと言うなんて、遥も大きくなったなあ」
と笑った。
大丈夫だから入ってきなさい。と言われて傘に入ると、ぽんぽんと頭のてっぺんを軽く叩きながら、「んー、やっぱり小さいまんまか」と真顔で言われた。
「賢太がでっかくなりすぎなんだよ！」
うがぁ、と文句を言うと、わはは、と大きな笑い声をあげる。

賢太は、お兄ちゃんの幼なじみで親友だ。
背は昔から高かったけど、高校生になってからガッシリとして、ますます大きく見えるようになった。
ぜんぜん知らない人だったら、ちょっと怖いカンジがすると思う。
でも、性格はすっごく優しい。

見た目からは逆に思われがちだけど、お兄ちゃんはシビアで強気、賢太は優しくて繊細。
兄妹ゲンカすると必ず賢太が仲直りのきっかけを作ってくれたし、今日みたいにお兄ちゃんのことで寂しい気持ちにさせられるときには、いつも根気よく私に寄り添ってくれる。
時々、賢太が本当のお兄ちゃんかと思うくらい。

「…賢太ありがと」
小さな声を聞き逃すことなく、
「どういたしまして」
と言ってくれる。

3。留守番と電話番と

宿題をしていたら、電話がなった。

「もしもし、佐倉です」

「…佐倉？高田だけど」

「…。」

眉間にしわがよる。

電話をかけてきたのは、今日、なし崩し的に付き合うことになった高田くんだった。

「友達からでも良いんだ」という高田くんの言葉と、斉藤さんの「誰でも良いから試しに付き合ってみてよ～」というわけのわからない要求に流されるように返事をしたものの、正直、こんなふうに自宅に電話をかけてこられるとは思わなかった。

私のお父さんは個人タクシーの運転手をしていて、常連のお客さんは直接お父さんの携帯電話に連絡してくる人がほとんどだけど、新規のお客さんは自宅に電話してくることのほうがおおい。

ので、今日みたいにたまたま私以外に誰もいないならともかく、普段は必ずお母さんかお父さんが電話にでることになっている。

ので、男の子からの電話なんて気まずいモノは、困る。迷惑。

「…なにか用？」

不機嫌な声が出た。

「…。佐倉にあいたいと思って。今から出て来れないか？」

時計は午後４時をまわったところだった。

「宿題してるし留守番頼まれてるからムリ。それに電話番も頼まれてるから電話切って良い？」
「…。佐倉にあいたくて、部活休んだんだぜ」
…なんか、ムカっとしちゃった。
あいたいなんて言われたくないし、部活サボったのをわたしのせいにされるのもイヤだし、雨の夕方に呼び出しなんて非常識だし、自宅に電話はかけて欲しくない。
でもひょっとしたら、このすべてを愉しめるのが男女交際というモノなのかもしれない。
チラリと今朝あったお兄ちゃんの彼女の顔が思い浮かんだ。
…ムリだ。
斉藤さん、私には男女交際は早過ぎたみたいです。
「悪いんだけど、今日のお付き合いの話はなかったことにして下さい」
電話を切ったとたん、こんどはお父さんから電話がかかってきた。
「…さっきから話し中だったけど、なんの電話だった？」
「んー、なんか（愛情の）押し売りみたいな電話？遥にはよく分からなかった。でもちゃんと断れたと思う」
とりあえず嘘はつきませんでした。
うちのお父さん、なんかやたら勘が良くて、下手に嘘つくとボロッツコミくらうのよね。
「ふぅん。…。まぁ良いや。お父さんの仕事の電話は特になかったんだね？」
なんだか疑わしげなお父さんの口調に寿命が縮む思いをしつつ、「なかったよー」と無邪気（に聞こえると良いんですが）な返事をす

ると、「…。じゃ、まぁ良いや」とやっぱり疑わしげに電話を切られた。

うー、心臓に悪い。
ものすごく悪い事したわけではないはずなんだけど、なんかやたら後ろ暗い気持ちになるなぁ。

やっぱりもう誰かと付き合ったりするのやめよう、と決意をあらたにした遥であった。

4。お兄ちゃんは悪い人かもしれない

朝。

お父さんとお兄ちゃんが廊下でなにやら話しあっていた。

台所ではなぜかお母さんが呆れたような溜息をついた直後にごまかすようにチラリと私を見る。

「遥、はやくご飯食べちゃいなさい」

この調子じゃ、今朝もピアノ弾かないで学校行くつもりなの？弾くか辞めるかどっちにしないと先生にも迷惑がかかるでしょうに、とお決まりの小言が続く。

「今日も部活ないから帰ってから弾くよ」

と言うと、

「また？吹奏楽部ってなんでそんなに暇なのかしらね」

と眉を上げた。

人数が少なすぎて合奏のやりようがないからですよ、お母さん。

お兄ちゃんと賢太は小学校のミニバスケから引き続き中学でもバスケ部に所属し、それはそれは華々しい活躍をしたそうで、その結果今年もバスケ部は満員御礼だそうだが、一方で吹奏楽部は毎年着実に部員数を減らし、もはや科学部か吹奏楽部か、といわれるほどの慎ましさなのだ。

そりゃ私だって華々しい運動部に所属して、さすがは佐倉孝明の妹だ、と言われて見たかったさ。

でもいままでお兄ちゃんたちがお父さんと一緒に合気道の道場に通

ったり、放課後のミニバスケで盛り上がったりしているのを羨ましいと思っていると、必ずどこからともなくお母さんがあわられて「あれは指を傷めます。ピアノを辞める覚悟はあるんでしょうね」とそれはそれは低ーい声で囁くから、あれよあれよと地味に吹奏楽部に所属することになるわけですよ。

うー、朝から盛下がった。

「どうした？遥。なにか悩み事ならお兄ちゃんに話してみるか？」
「…人生で百万回目のピアノ辞めたい病を発症したみたいです」
「…その議案につきましては、謹んで百万回目の却下を提案させていただきます」
「…」

そうなのだ。
なぜかピアノに関しては、声高にデッドオアアライブを迫るお母さん以上に、お兄ちゃんとお父さんとなぜか賢太までが続けさせたがっているらしい。
私は、ピアノが自分に本当に必要なモノなのかいまいち分からないまま、いつもなら私の味方になるはずの3人が結託してやんわりきっぱりピアノ押しなので、なんとなくやめどきを失ったままピアノを１０年間続けている。

昨日の男女交際うんぬんといいピアノといい、私ってまわりに流されやすいタイプなのかしら？

…ところで男女交際といえば
「今日は昨日のお兄ちゃんの彼女は待ち伏せてないのかしら？」
昨日はたしかこのあたりで、偶然にもばったりあった、はずなんだけど。

「お兄ちゃんには彼女はいないし、待ち伏せではなかったんじゃないのかな？」

にっこりと笑ったお兄ちゃんの後ろに悪魔が見えました。

5。放課後の決戦　ｖｓ高田

「納得できない」

放課後のひと気の無い廊下で詰め寄られたら、誰だって身に危険を感じるのではないだろうか。
私は高田くんと少し距離をおくようにそっと一歩後ずさった。
「そうだね。ごめんね。でもやっぱり付き合えない」
「…なんでっ」
電話をかけられて迷惑だって思ったから。
友達からでも良いって言ったのが嘘だってわかったから。
私は高田くんを好きにならないから。
勝手で残酷な理由ばっかりしか思いつかないから口を利くことができなくて、だんまりになってしまう。
結局、調子に乗ってろくな考えもなしに返事をした私が不誠実だったのだ。
「…。ごめん」
「いやだ」
私をみつめる高田くんの目がすぅっと暗くなったと思ったら、どんっ、と肩の下を捕まれて乱暴に壁に押さえ付けられた。
「好きなんだ。佐倉が」
ゆっくりと目を閉じながら近づいてくる顔に軽く身をよじって逃げようとするけど、びっくりするくらいの強い力で押さえ込まれていて逃げることが出来なくて、ちょっと愕然とした。
やばい。
とっさに、できるだけ顔をよじりながら膝を身体と身体の間に割り込ませるように押しやって隙間をつくると、すぐさま足の裏を高田くんのみぞおちに当てて思いっきり蹴りだした。

ばんっ。
大きな音をたてて高田くんが向かい側の壁に吹っ飛ぶのと、
「遥！」
すぐそばの曲がり角から賢太があらわれるのはほとんど同時だった。

6。衝撃的展開

壁にしたたか背中を打ってうずくまる高田くんと、その前で壁にもたれて呆然とする私。
この場面だけを切り取ると、被害者が高田くんで加害者が私みたいに見えるんじゃないかしら、という私の心配を知ってか知らずか、賢太はまっすぐに私のところに来ると気遣わしそうに顔を覗き込んで「大丈夫？」と聞いてくれた。
なんとか頷くと、私の頭を片手でぐぃっと引き寄せ胸元に顔を押し付けるように隠してから高田くんに向き直った。
「高田、てめぇ…」
聞いたことがないほどの低い声に、思わず私がびくっと肩を揺らして賢太にしがみついてしまった。
賢太は一瞬はっとしたように私の様子をみて、今度はいくらか落ち着いた声で「…どういうことか説明してもらおうか」といった。
高田くんがなにも答えられずにいる間、私の頭の中は疑問でいっぱいだった。

なんで賢太が中学校にいるの？
なんで高田くんの名前を知ってるの？
なんでタイミングよくここにあらわれたの？
などなど。

「つまり、高田が親父のいってた悪い虫ってことだろ」
聞き慣れたお兄ちゃんの声にまたまたびっくりしてそちらを振り向こうとしたけど、賢太の手の平がガッチリと頭を押さえ付けていたので振り向くことができなかった。
うう、今日はよく押さえ付けられる日だわ。
でも今度の相手は賢太なのでおとなしくされるがままになっていた。

「高田さぁ、昨日の４時頃にうちに電話してこなかった？」
というお兄ちゃんの声に、
「あ、はい」
と高田くんが小さな声で答えているのが聞こえた。

！

なんで電話のことまで知ってるの？

「うちの親父がね、高田が電話してきたのと同時にうちに電話して、２回も話し中だったうえにその後の遥の電話の出方がおかしかったから、悪い虫がついてるのかもしれないって心配しててね。様子を見て害虫駆除をしてくるようにっていいつかったとこだったんだ。ちょうど竹中先生にもバスケ部のコーチを頼まれてたし。…まぁ、ここまでの衝撃的展開を目撃するとは期待してなかったんだけど、ね」
最後のひとことをやけに意味ありげにゆっくりとつぶやいたように感じたのは、はたして私だけかしら？

それにしても、電話の出方、とは。
確かに、立て続けにかかってきた電話に、まさかまた高田くんからじゃないよね、とためらっていつもより電話に出るタイミングが遅くなってしまった記憶はある。
でも、たったそれだけでこんなにあれこれ分かって手配までしてしまうなんて、うちのお父さんって何者？
…いや、たぶんただの親バカだとは思うけど、念のためわたしはお父さんをエスパー認定しておくことにした。
「でも、どうやら父さんに頼まれたほうの害虫駆除はもう必要ないみたいだし、あとはバスケ部に行けば良いのかな？」
お兄ちゃんの声に、心なしか賢太の手の平が強張った気がした。
「俺は…」

「今日は俺ひとりで顔出してくるから、賢太は遥を家まで連れて行ってくれて良いよ。高田は、めでたく昨日のサボりが発覚したことだし、今日は基礎練をダブルでやってもらうことにしよっかな」

…高田くんはバスケ部所属だったのね。

お兄ちゃんは高田くんを引きずるように連れて行った。見てないけど。高田くんのものと思われる足音が不自然だったから、たぶんそうなんだろう。

…。

ところで、いつまでこの態勢でいるんだろう？

…。

なにかいったほうが良いのかしら？

…。

えーと、ありがとう、とか？

…。

かなり気まずいくらいの時間が経過してからやっと、ふぅぅ、と賢太が溜息をついてゆっくり私の頭にあててていた手の平から力を抜いた。

ええと、動いても良いのかな？

そぉっと少しだけ頭を動かして目だけで賢太の顔を盗み見ると、賢太は困ったような戸惑っているようななんとも心細げな表情で、お兄ちゃんたちがいなくなった廊下を見つめていた。

7。雑巾ｖｓ勇者

次の日、教室に入ると、高田くんがボロ雑巾になっていた。

正確にいうと、手足をちからなくぶらーんと投げだし、机と一体化しそうなくらいにべたぁっと突っ伏して、底無しに暗いオーラの発生源になっていた。

彼のまわりだけ空気が澱んでいるように見えるのは私だけではないらしく、クラスの誰も彼の近くに近寄らない。

私ももちろん近寄りたくはないが、彼の斜め前に席があるので、カバンをおくためには多少近くまで行かなければならない。

カバンを置いたら即座に逃げられるように慎重に手を伸ばしてカバンを机に置こうとしたとき、ボロ雑巾から声が聞こえた。もとい、高田くんが口をきいた。

「ごめん」

…。

良いよ、とは言いたくないけど、イヤだ、って言うのもどうかな？というくらい高田くんは打ち萎れてみえた。

「昨日、お兄ちゃんになにか言われたの？」

私が知る限りではあの後家に帰ってきたお兄ちゃんはいつもどうりかむしろ爽やかな様子で、お父さんからお小遣までもらって「害虫駆除ってボロい商売だなぁ」なんてご機嫌でインターネットショップのサイトをチェックしていたんだけど。

「…佐倉先輩もだけど、高橋先輩にあんな睨まれて殺されるかと思ったし、竹中先生にもサボりがばれて締め上げられたし、部活の奴ら全員に振られたの知られたし、佐倉先輩には基礎練トリプルでやらされたうえにパシリにされて体育館の掃除ひとりでやらされて、なのに今度高橋先輩がきたらもっと酷いめにあうから覚悟しとけとか脅されるし、…もう俺部活辞めたい。てかいっそ死にたい」

死にたい、と高田くんが呟いたときに彼の後頭部から魂がはんぶん抜けかかっているように見えました。合掌。ご冥福をお祈りいたします。

「グッモーニンおふたりさん、朝から仲良しねぇ、ひゅーひゅー」と斉藤さんがあらわれた。

というか空気を読まないのもここまでくるともはや勇者だ。

「グッモーニン」と勇者があらわれた。

「仲良くねえよ。もう振られた」

雑巾が地の底から響くような声を出した。

勇者は混乱した。

「え、付き合うことになったのはおとといよね？」

「それでおとといに振られて昨日蹴られて今日死亡した」

「はやっ！」

ガビーン、と固まった斉藤さんをよそに、高田くんは「ところで」とこっちに視線をよこした。

「そっちこそあの後どうだったんだよ」

…。

「別に」
「なわけないだろ。告られたんじゃねえの？…高橋先輩と付き合うんだろ」
「なんで賢太が私に告白するのよ。高田くんはくるくるぱーなの？お説教されただけだよ。友達からでも良いから付き合ってくださいというのは、友達になりましょうという意味ではなくて、友達だとしか思えなくてもかまわないから自分のモノにしたいっていう意味なので以後気をつけるようにって大変わかりやすく説明されましたけど？」

それがなにか？と馬鹿にしたように見下ろすと、高田くんは盛大な溜息をひとつはいて「やたらめったらおとなでムカつく」といいながら携帯を手にどこかに行ってしまった。

8。ピアノ辞めたい病

6月に入ってからの私は、朝から晩までピアノばっかり弾いています。

今月行われる発表会にむけて、近代作曲家の作った2曲を課題としてあたえられているのですが、これがまぁさっぱり手応えが掴めなくて（泣）

中学生には難しい曲とはいえ、暗譜も終わったし、指も譜面通りに動かせるようになっているのに、いまだに納得のいく仕上がりにならない。

「機械的」

「強弱があまい」

「アクセントがわざとらしい」

「これみよがし」

「なに考えて弾いてるの？」

「全然だめ」

「ペダルもっとすばやく踏みかえて」

「つまんない」

ダメだしばかりのレッスンは３０分間を過ぎても終わることなく、最近は７５分間が定番化しつつある。

「もう遅いから明後日にしましょう」

週１回のはずのレッスンも、１日おきに行われている。

「ありがとうございました」

レッスン室を出ると、今日のお迎えは賢太だった。

ピアノ教室からは歩いて２０分くらいだけど、最近はレッスンを7時からにしてもらっているので、防犯のため、行きも帰りも誰かに

送り迎えをしてもらっている。
ほとんどはお父さんかお兄ちゃんなんだけど、たまに賢太も送り迎えに来てくれる。
「お疲れ」と頭を撫でてくれるけど、思うように笑顔を返せないことが申し訳ない。

才能に恵まれていないことはわかってるし、要領の良いほうでないのもわかってる。それでも、努力することで、量を質にかえられるかもしれないと思って練習をしている。
…。
でも、いまの練習量では足りないみたいで、いまの努力じゃ足りないみたいで、いまのやる気じゃ足りないみたいで。

この発表会が終わったら、今度こそピアノをやめよう。と、人生で百万何回目かの決意を胸に、自転車の荷台で録音しておいた今日のレッスンを聞きながら、賢太の背中にしがみついて泣いた。

賢太は私が泣いていることに気付いて、いつもよりたくさん遠回りをして送ってくれた。
なにもいわずに頭をぽんぽんして、笑顔をたくさんたくさんくれる。
その優しさに胸の真ん中がきゅうっとなって、賢太の胸におでこを擦り付けたいような気分になる。

…賢太は付き合ってる人とかいないのかなぁ？

お兄ちゃんの（元）彼女みたいに私を邪魔だと思わないなら良いんだけど、もし、遥を構うのやめて、とかっていわれたら、すっごくイヤだ。

だって、そしたらホントにあえなくなっちゃう。
賢太はお兄ちゃんの幼なじみで親友だけど、私のことを妹みたいに可愛がってくれるけど、彼女がいたら、やっぱりそっちのほうを大切にするよね？
賢太すっごく優しいし、彼女を泣かせたりしないと思う。お兄ちゃんは彼女に束縛されるのとか嫌いみたいで、私のことをとやかくいわれたりすると不機嫌になってすぐ別れちゃったりするけど、賢太は他人だもん。私のために彼女と別れるとかってありえないよね。

「発表会、俺も見に行くね」

完全にピアノとは無関係なことに頭を悩ませてたからうまく反応ができなかったんだけど、賢太には私がピアノでいっぱいいっぱいになってるように見えたと思う。
…いや、事実いっぱいいっぱいですけど。
心配そうに揺れる賢太の瞳をみていたら、思わずぎゅうって抱きつきたくなって。
ぎゅうって抱きついたら、賢太はちょっと困ってるみたいだったけど、優しく抱きしめ返してくれた。

「頑張るからね。もっともっと頑張るからね」

だから、もう少し私から賢太を取り上げないでください。
…と、なんともすじちがいなことをピアノの神様にお願いした私であったが、なにも知らない賢太が「うん」と返事したのはいうまでもない。

9。不審者認定

学校帰り。
ピアノに行き詰まっているせいか、昼休みに中山さんから「最近の遥ちゃん、雰囲気が澱んでいるね」と言われたぱっとしない私の横に、黒い車が止まった。
…知らない車だ。
窓がウィーンと下がると、運転席に座った男の人と目があった。
…知らない人だ。

「お姉さん、送って行ってあげようか？」
…。
車の運転をしている（免許を持っている）ということは、少なくとも１８才以上のはずよね？
中学校の制服を着ている時点で、私がこの人よりお姉さんなわけはないはず。
この人はくるくるぱーか？
ていうかこれってナンパか？
でも１８才以上の人が中学生をナンパするものなの？
それって変態じゃねえの？
だとしたらこの人は不審者ということになるよね。
まじで？
普通にさわやかに声かけてきて不審者なの？
よく見たら実は知り合いなんてことはないかしら？
じぃっと目をこらして見ても、やっぱり知らない人な気がするんだけど…。

「お姉さんかわいいね。送って行ってあげるから車に乗りなよ」

！

…変態だ。

彼の後ろに山に埋められそうな私が見えます。

この人は不審者認定になりました。

私はためらうことなく車に背を向け、となりにあった知らない家の呼び鈴を鳴らして玄関に入って行った。

ピンポーン。

「おや、嬢ちゃんのお迎えかな？」

山本さんがインターホンのスイッチを入れると、お兄ちゃんの声が聞こえた。

「佐倉です」の声に「はいはい今行きます」と応えると、にっこり笑ってこちらを振り向いた。

「お迎えですよ」

「すいません。すっかりお世話になってしまって」

「いいよいいよ。でも怖い世の中だねえ。中学生の女の子相手に。遥ちゃんはかわいいから気をつけるんだよ」

玄関に出るとお兄ちゃんと賢太が迎えに来ていた。

「すいません。妹がお世話になりました。助かりました。ありがとうございます」

お兄ちゃんが言うと、賢太も一緒に頭を下げた。

山本さんはまた「いいよいいよ。助けになれたんならよかったよ」と言った。

「母が改めてあいさつに伺うと申しておりました」との言葉にも「いいよいいよ。私はなんにもしてないよ。遥ちゃんの機転が良かっただけだから」と言ってくれた。

さっき不審者に声をかけられた私は、とっさに山本さんの家の呼び鈴を鳴らし、家にお邪魔し、電話を借りてお母さんに連絡したのだった。
私の話を聞いた山本さんが外の様子を見ると、慌てたように黒い車が走り去るところだったそうで、いちおうもう大丈夫だろうとは思ったものの、念のため連絡して迎えにきてもらうように薦められたのだ。
…で、最近しょっちゅうバスケ部にコーチにきているお兄ちゃんたちが迎えにきてくれたわけなんですが、
「ふたりとも帰ってきて、バスケ部の人達は良かったの？」
「どっちが大事かっていったらこっちだからな」
バイト代もらってるわけじゃないし、と淡々と話すお兄ちゃんのとなりで、賢太はずっと困ったみたいな顔をしていた。
やっぱりホントはバスケ部の人達は良くなかったのかな？
「それにしても今日のことといい高田のことといい、最近のお前は変なフェロモンでも出てるんじゃねぇの？」
…失礼な。
「お兄ちゃんに分からないモノが遥に分かるわけないじゃん。でもそういえばテレビでやってたけど、フェロモンって遺伝子的に親しい者同士だと効果無いから分からないんじゃなかったっけ？」
「…ああ、なるほどね」
お兄ちゃんがチラリと視線を送ったけど、賢太はやっぱり困ったような顔をして黙っていた。

10。スピリチアルな集い

角谷先輩は、とても綺麗な顔をしている。
泥臭い力仕事などとてもしそうのない美少年で、なにか考え事をしているときなどに小首をかしげて「ん？」なんてする姿は、まるでかわいい小鳥みたいだ。
成績優秀。
特技はピアノ。

友達の荒井さん曰く、座右の銘は「来る者拒まず」で彼女が8人。
それってつまり、こちらにその気がなければ超安心ってことだよね。
「すごくたくさん練習するんだね。コンクールにでも出るの？」
「いえ、これは発表会の曲です」
それにしても、角谷先輩は帰らないのだろうか？
私は先日の不審者騒動以来お父さんに単独下校禁止令を出されてしまったので、お兄ちゃんか賢太（もしくは2人）がバスケ部のコーチを終えて迎えに来てくれるまで音楽室で待機しつつ、相変わらずピアノでドツボスパイラル中なわけですが、他の吹奏楽部員は角谷先輩を除いてみんなとっくに帰宅してしまっていた。
「楽譜見ても良い？」
「良いですよ」
カバンの中から譜面帳を取り出して、これとこれです、と開いてみせると、「ふぅん」と小鳥のように小首をかしげて椅子を引きずってきて、そしてそのまま私の隣に座るとピアノに手を伸ばした。
…！
クリティカルヒットなみの演奏を、初見でさらりと弾かれてしまっ

た。
いくつかのミスタッチなんてどうでもよくなってしまう音の響きと説得力。
きっと、音を奏でているのはピアノじゃなくて角谷先輩そのものだ。

「…泣いてるの？」
小鳥のように角谷先輩が聞いた。
「泣くでしょう普通。こっちは毎日耳から煙り出しながら頑張ってるんです」
うふふ、と相変わらず小鳥のようにかわいらしく笑うと「不幸な人間のほうが良い音が出るらしいよ」と言った。
「だから羨ましくないでしょ？」
「…角谷先輩は不幸なんですか？」
美少年で成績良くてピアノが上手で彼女が８人なのに。
「うーん、例えばね、いま僕が家に帰ると、母と母の友人達が昆布と焼き魚と紙で作った人形を備えた祭壇にむかってありがたい祝詞を危機迫る形相で一心不乱に唱えていてね、何故そんなことになっているかというと父に外に愛人がいるのは僕のご先祖様が成仏せずにいるために我が家が祟られているそうで、彼女達はそれらを正しくあるべき姿にもどすために自己犠牲の精神で奉仕しているんだって。ちなみに彼女達に言わせると、僕の背中には色欲の悪魔が張り付いてるそうです」
「…簡単に言うと、家でスピリチアル心霊おばちゃんの集いが行われていてめんどくさいということですか？」
「…。あれ？あんまり不幸じゃないっぽいね」
んー？と首をかしげている姿はやっぱり小鳥のようにかわいらしい。
「小鳥のような美少年で、成績優秀で、ピアノが上手で、彼女が８人。たとえ親が残念でも、角谷先輩はとっても素敵ですよ」
「…。えーと、一緒にピアノ弾こっか？」
頬を染めてピアノに向かう姿は、やっぱりとってもかわいらしかっ

た。

そして、ピアノがすごーく上手。
私の腕までピアノになって、音を奏でているみたい。
なにより、こんなに楽しいピアノは久しぶりで、先輩も楽しそうで、
ふたりで顔を見合わせて「うふふ」と笑うと、まるでピアノも笑っ
てるみたいだった。

11。スピリチアルビューティー

ステージに上がると、照明に暖められた空気が春みたいだった。
ピアノの音は、床や椅子や、私の背中からも鳴ってるみたいだった。
嬉しくて滑りそうな指や、つい小さくなってしまう和音の小指の音に気を引き締めようとは思うけど、それ以上に顔が笑けてしまってどうしようもない。
弾き終わるとたくさんの拍手に、誇らしいような恥ずかしいようなんとも言えない気持ちになって、それをごまかすためにいつも以上にゆっくりとお辞儀した。
私の演奏が最後だったので、そのまま発表会参加者の集合写真を撮影して、参加記念品をもらった。
みんなが先生に挨拶し終わるのを待ってから挨拶しようとステージの端っこで立っていると、ステージの下から角谷先輩に「遥ちゃん」と声をかけられた。
「すっごい上手だったねー。感動しちゃった」
とニコニコしている先輩の後ろには、少し距離を置いて年配の紳士とすごい美人が立っていた。
「…先輩のお父さんとお母さんですか？」
しゃがんで目線を合わせて、噂の、と小声で付け足すと、先輩も小声で、そうそう、と笑った。
「すっごい美人じゃないですか。スピリチアル心霊ビューティに改名ですね」
「わはは。それすげえツボに入るんだけど」
くっくっくっくっとふたりで声を殺して笑っていると、いつの間に

か先生が後ろにきていた。
「…佐倉さん？」
「あ。先生、今日はありがとうございました。こちらは先日お話させていただいた角谷先輩です。先輩、こちらが橋本先生です」
「こんにちは。角谷優也です。これから宜しくお願いします。お母さん、橋本先生に挨拶して」
先輩に手招きされて、先輩のお母さんは少し緊張した面持ちでお辞儀をした。
「この度は息子が無理なお願いをしまして申し訳ありません。息子は私が少し教えただけで、本格的にピアノを習いに行ったことがありませんので、たぶんご迷惑ばかりおかけするのではないかと心配しているのですが…」
私もこれを聞いた時にはびっくりしたし、ぶっちゃけ悔しくて涙が出そうになったけど、なんと角谷先輩はピアノを習いに行った経験がなかったそうだ。
小学校までは某有名音大卒のお母さんが教えてくれていたそうだが、もろもろの家庭の事情（？）により、最近はそれも難しかったそうで（涙）。
…で、なんと今度から私と同じ橋本ピアノ教室に通うために今日は挨拶を兼ねて見学に来ていたのだ。
「いえいえ、佐倉さんから聞いて、とっても楽しみにしていたんですよ。…ところでお母様は、現在専業主婦でいらっしゃるそうで」
キラーン、と先生の目が光った。
実は橋本先生は園児ちゃん達を教えてくれる講師をずっと探していたそうで、先輩の話をしたときも、むしろ音大卒のお母さんの存在にくいついていたのだ。
まさかスピリチアルな趣味で忙しいみたいですよというわけにもいかず黙っていたんだけど、意外とお母さんも満更ではない様子なので、もしかしたらこのまま上手く話がまとまるのかもしれない。
ふたりから離れるように舞台から下りて先輩にそっと耳打ちする。

「…なんか、思ったより良い反応っぽいですね？」
「ホントだね。けっこう意外」
「スピリチアルビューティはピアノがお好きなんですね」
「ビューティ言うな。面白すぎるから」
「だってホントに美人ですよ。おまけにうちの母よりかなり若いです。欲しがってた妹、いまからでもお願いできるんじゃないですか？まあ、弟になる可能性は否定できませんけど」
「えー、弟にハルカって名付けても大丈夫かなぁ？」
「…あ。先輩の背中に変態馬鹿の悪魔が張り付いてる」
きてます。とポーズをとると、後ろで先輩のお父さんが「ぶっ」と片手で口を押さえて噴き出していた。
…ろくでもない会話を聞かれてしまった。

１２。プラネタリウム

お兄ちゃんが博物館に連れて行ってくれるなんておかしいと思った。
はぁ、とみんなに分からないように溜息をついた。
ただしみんなは私のことなんて気にしてないけど。
ちなみにみんなっていうのは私の１．５メートル前を歩く４人の高校２年生（お兄ちゃん、賢太、他女子２名）のことです。
もともと、今日はお兄ちゃんのクラスの企画遠足のために実行委員の２人（お兄ちゃんと女子その１）で博物館に下見に行く予定だったんだけど、「２人きりも気まずいから賢太とか連れて行くわ」とお兄ちゃんが言ったらしい。
ついでに遥を連れて行けばお小遣ゲットだぜ、と悪巧んだまでは良かったものの、待ち合わせ場所に行ったら彼女は彼女で友達を連れて来ていて、お兄ちゃんやっちゃったね、と一瞬で理解できるほどの気まずい空気になりました。
「えーと、せっかくだけど遥は帰ります。帰り道は分かるので１人で大丈夫です」
「え、でも遥を１人で帰らせるわけには…」
「へいきへいき。携帯持ってるし」
心配する賢太に、ほら、と見せてあげたよ。発表会のご褒美に買ってもらったピンクのキッズケータイ。ＧＰＳと防犯ベル機能標準搭載。
これがあるおかげでいまは単独下校禁止令も解除されてるし、ひとりで電車乗って帰るくらい全然ヘーキ。
むしろこの場に居続けることのが大変だよ。
後ろのお姉さん達、待ち合わせ場所で遥を紹介されて明らかに困惑してたし、帰るって言ったら分かりやすくほっとしてたし。
「でも」と食い下がる賢太に被せるように「遥、とりあえず一緒に

いろ」と言ったお兄ちゃんの顔には、悪巧みがばれたらマズイから、とくっきりはっきり書いてありました。
お兄ちゃんさいてい。
結局「高田とのこと、子細漏らさず親父に報告しても良かったんだぞ」と耳元で囁かれて帰れなくなりました。
お兄ちゃんさいあく。

はぁ、ともう一度溜息をついたときに「遥ちゃーん！」と道の向こうから先輩に声をかけられた。
こちらが気づいたのが分かるとためらいなく車道を渡ってきたんだけど、車通りが少ないとはいえ、片側2車線の全4車線をろくに安全確認もせずにダッシュしてくるので轢かれるかとヒヤヒヤしましたよ。
「どうしたの？死にそうな顔して歩いてたよ」
いや、死にそうなカンジで走ってきたの先輩ですから。
でも考えようによってはこれは地獄に仏で渡りに船。このまま先輩とお出かけしちゃえば良いんじゃない？
適当に時間潰してお兄ちゃん達が帰るときに合流すればぜんぶまるっと解決しそう。
「先輩、これからデートしませんか？」
「良いよ」
さすが来る者拒まずの角谷優也。即答だぜ。
「お兄ちゃん、下見が終わるまで先輩と遊びに行ってくる」
「ダメだ」
こちらも即答。ただし賢太です。
あまりのはやさに出遅れたお兄ちゃんはビックリしたみたいに賢太を見たけど、すぐに立ち直ると「そうだな、ダメだ」と続けた。それからすごく言いにくそうに「一緒にくるんなら良い」と言った。
首を傾げた小鳥のポーズでみんなの様子を見ていた先輩が、ふわり、とお花が咲くような笑顔を浮かべて「角谷優也です。宜しくお願い

します」と挨拶したら、女子高校生2人が顔を真っ赤にしてコクコクと頷きまくってました。抜群の破壊力です。

「ところで先輩はあんな時間にあんな場所でなにしてたんですか？」博物館のプラネタリウムが始まるのを待っている間に、気になっていたことを聞いてみました。

「暇だったら付き合ってって言われてドライブしてたんだけど、遥ちゃん見つけて暇じゃなくなったから…」

「それで相手はなにも言わなかったんですか？」

「あんまりしつこいとめんどくさいからコロスって言ったらどっか行った」

…それは犯罪です。

「着信拒否指定にしたからもうあうこともないと思う」と爽やかに言い放つ先輩は、そのうち誰かに刺されると思います。

13。ハッピーバースディ

音楽室で、吹奏楽部のみんなとマウスピースをブーブー鳴らしながら遊んでいたら、同じクラスの山田さんがやってきた。
「佐倉さんにちょっとお願いがあるんだけど」と言われて「なあに？」と聞くと「ここじゃちょっと…」と言葉を濁された。
それを聞いた3年の先輩が「良いよー。行っておいでー」と手をパタパタ振ってくれたので廊下に出ると、そのまま隣の教室に引っ張り込まれた。
「あのね、佐倉さんは井上くんをどう思う？」
「…」
別になんとも、というのが率直なところなんだけど、話の方向性が分からなかった。
正直、山田さんも井上くんもとくに親しいほうではない。
山田さんは背の高い発育の良い女の子で、教室の向こうで「うふふ」なんてかわいい声で笑っているのを見かけた時に、女子力満点、と思った記憶があるし、井上くんは眼鏡をかけた爽やかなクラス委員長で、眼鏡をかけた爽やかなクラス委員長だなぁ、という印象がある。
でも、それがなんで？
「あのね、今日は井上くんの誕生日なのね。それで、お誕生日プレゼントを渡したいんだけど、佐倉さん渡してきてくれないかな、と思って」
…だから何故？

音楽室に戻ると、角谷先輩がひとりで本を読んでいた。
私は隣の席に無言で座ると、机に両手と頭をつけて突っ伏した。
「…どうしたの？」

「…。よくわかりません」
山田さんは、井上くんのことが好きなの、もうずっと前から、と言った。
それから、誕生日プレゼントを渡したくて今日何度も渡そうとしたけど受け取ってもらえなかったと言った。
そして、私に渡してきてと言った。井上くんは佐倉さんが好きなのと言った。
私は山田さんからのプレゼントには変わり無いから結果は同じだと思うと言った。
それでも良いのと山田さんは言った。ダメだったら教室に持って来て今度こそあきらめるからと言った。
卓球部だという井上くんにプレゼントを渡すために体育館で彼に声をかけると、彼は私の持っていたプレゼントを見て、控えめに一瞬だけ困ったような様子を見せた。今日何度も見ていた包みなのだから当然だと思う。
私は、山田さんから頼まれてきたけど、無理に受け取らなくても大丈夫だよ、と言った。
山田さんが言ったことがホントなら、私は井上くんにひどいことをしているんじゃないかと思ったから。
でも、井上くんはふわりと微笑んで「ちょうだい」と手を伸ばした。
私が「お誕生日おめでとう」と包みを差し出すと「どうもありがとう」と嬉しそうに受け取った。
「…で、遥ちゃんは悪いことしたかもって後悔してるの？」
横を見ると、先輩が私と同じように両手と頭を机にくっつけて、顔だけ私に向けてじぃっと私を見つめていた。
「…。よくわかりません」
だって、井上くんはホントに嬉しそうだったから。
…でも実は話はそれだけではなく。
釈然としない気持ちのまま山田さんに報告に言ったら、山田さんは嬉しそうに「良かった。ありがとう」と言った直後に、迎えにきた

バスケ部の3年生と帰って行ってしまったのだ。
「あ、彼氏が迎えにきたから帰るね、ばいばい」と帰って行ってしまったのだ。
…。
「まあ、遥ちゃんが考えても仕方ないことかもしれないよ？」
悩まなーい悩まなーい、と頭を優しく撫でられると、その心地良さにふにゃん、と瞼が閉じてきてしまう。
いつにない精神疲労のため、いますぐ眠れる自信があります。
…なんか陰った、と目を開けると、先輩の長い睫毛が顔のすぐそばにあった。
やばい。

「…。鉄壁のディフェンス」
とっさに顔の横にあった右手で口を覆いました。
「ぁっぶない。危うくキスするところだったじゃないですか」
口を覆ったままいうと、あいかわらずの至近距離でかわいらしくちぇっと言われた。
ちぇっていうな。
「…いやだった？」
いやっていうかなんていうか、高田くんの時みたいに絶対ムリっていうのとはちょっと違うと思うけど、でもこういうのって普通は恋人同士ですると思うんですけど？
「…いちおう初めてなのでガードしてみました」
先輩は、ふふふ、と声を出さずにかわいらしく微笑むと、そっと私の右手をどかして優しくキスをした。

１４。キスするタイミング

「今日から、学校もピアノも角谷先輩に送り迎えしてもらうから」
朝の食卓で、私は宣言した。
どういうことだおいっ、と目を白黒させてお兄ちゃんを睨み付ける
お父さんと、知らない知らない俺知らないっ、と首をぶんぶん振る
お兄ちゃんの無言の攻防をサクッと無視してお母さんが口を開いた。
「角谷くんって発表会の時に挨拶してくれた男の子よね？」
「うん。角谷先輩のお母さんが橋本ピアノ教室の園児ちゃんをみてくれるようになったおかげで、レッスン時間を学校帰りの早い時間に替えてもらえるようになったし、部活も一緒だから。お兄ちゃん達みたいに無理しないでも送り迎えできる人だし、お願いしたら別に良いよって言ってくれたから」
「ふぅん。お母さんはあなたたちが良いならそれで良いとは思うけど？」
「うん。じゃあそうする」
ごちそうさまでした、行ってきます、となるべくお父さんとお兄ちゃんを見ないように言った。

「佐倉さんって角谷先輩と付き合ってるの？」
今日はみんな挨拶抜きにこれ言うな。
「違うよ。一緒に登下校することにしただけです。過保護な父と兄とその親友が私の送り迎えに神経を擦り減らしてるみたいだから、手間を省いてあげようと思って」
昼休みは、「角谷」から始まるおしゃべりをするために集まった人がたくさんいたので、いつにない大人数で食べることになりました。
「付き合ってない」「違います」「知りません」「してません」をそれぞれ五回ほど繰り返したら、いつの間にか話はお兄ちゃんと賢

太の話に替わっていった。
「ねぇねぇ紹介してよ」という女子多数。
「あのね、私達とお兄ちゃん達って４つ年が違うわけじゃない？お兄ちゃん達が私達と同じ中１の時に私達は小学３年生で、お兄ちゃん達が大学に入学した時には中学３年生。この年の差って恋愛相手に求める事柄のレベルが違いすぎて、恋愛対象にはならないでしょう？それでも良ければ紹介するけど？」
いやーん、恋愛相手に求める事柄ってなにぃ？とか激しく身もだえる彼女達をスルーしてトイレに行こうとしたら、高田くんが携帯持って廊下で待ち伏せてた。

「だから高橋先輩じゃなくて角谷先輩なのか？」
「…さあ？私は子供だから高田くんの言ってる言葉の意味がよく分からないよ。こういうことはもっと大人な人に聞くものなんじゃない？…ってお兄ちゃんに報告したら？」
最後の一言を言いながら携帯を指差したら、高田くんは分かりやすく真っ赤になった。
「…俺はっ！」
「良い後輩だと思うよ。私に対する思いやりには欠けるけど」
ばいばーい、と手をヒラヒラさせてその場をあとにした。

「…角谷先輩はキス魔だったんですね」
その日３回目のキスをされた後でいうと、「自分からするのは遥ちゃんだけだよ？」と言われた。
微妙に言葉が通じてない気がします。
「…いやだった？」
「いやではないですけど、誰かに見られてめんどくさいことになりたくないです」
「そっか。じゃあこれから気をつけるね」
角谷先輩とキスをするのはいやじゃない。

これは昨日発見した新事実。
漠然と、好きだから付き合う、好きだからキスする、というイメージがあったんだけど、どうやら違ったらしい。
でもそんなこと、いままでのお兄ちゃんの行いを思えば気がついてしかるべきだった。
好きとか嫌いだとかで割り切れない、一緒にいたりキスしたりできる人というのが存在する。
逆に、好きでも一緒にいたりキスしたりできない人もいる。

胸が苦しいばかりでは、心が病んでしまいそうで。
暗いなぁ、と溜息をつきそうになったら、先輩から4回目のキスをされた。
うまいなぁ、と思いつつ、「気をつけるって言ってませんでしたか？」と突っ込むと「誰にも見られないように気をつけたよ」と自慢げに言われた。
小さな子供みたいなかわいらしい顔つきに、思わず笑ってしまった。
ホントうまいなぁ。

１５。罪と罰

体育館に響く黄色い声は、応援ばかりではない気がする。
今日は、バスケ部員ｖｓバスケ部ＯＢの試合。
日曜日の余興試合にもかかわらず、ギャラリーが多い。とくに女子。
遠征費や合宿費の寄付を募るための試合だからギャラリーは多いにこしたことないんだろうけど、女子高生と女子中学生ばっかりじゃたいした単価にならなさそう。
「佐倉先輩と高橋先輩、だーい人気だねー！」
すぐ隣に座っていても小さな声では聞こえないから、手でメガホンを作るみたいにしながら斉藤さんが叫ぶ。
「目の保養に行こう」と斉藤さんが誘うからどこに行くのかと思えば体育館で。
３００円の入場料を払って中に入るといつもお昼を一緒に食べてる他のメンバーもちゃっかりいて。
最前列に場所を確保していたのには驚きました。いったい何時から来てたんだ？
ビックリした様子のお兄ちゃんが話し掛けにきたり、他にも見覚えのあるバスケ部ＯＢが手を振ったりしてくれたから、「佐倉孝明の妹」としてやたら注目を浴び、試合前のウォーミングアップの間にいろんなバスケ部員やＯＢが挨拶に来てくれたんだけど、私のご学友たちの狙いはまさにそこにあったらしく、「ふっふっふっ」と終始ご機嫌なご様子でした。
賢太は、やっぱりビックリしたみたいにこちらを見たけど、結局私の近くには来なかった。

中学生と高校生の体格差に、一方的なゲームになるだろうと思ったものの、いざ試合が始まるとけっこう良い勝負をするので見応えは充分にあった。

後で聞いたら、お兄ちゃん達の学校みたいに進学校で運動部に力を入れてない高校の人達は、中学卒業以来のバスケだったそうで。
さすがにしょっちゅうコーチに来てるお兄ちゃんと賢太は良い動きをしてるみたいだったけど、バスケは2人でやるスポーツじゃないもんね。
前半終わってOBチームが8点リードでした。
バスケは1回ゴールしたら2点入るから、5回普通にゴールするか、スリーポイントエリアから3回ゴールすれば逆転になる。
相手チームより余分に、って考えたらちょっと難しいみたいだけど、OBチームはもうバテバテっぽい人が目立つから、ひょっとしたらひょっとするかも？
「タオル３０００円でーす！ご協力お願いしまーす！」
ハーフタイムに入ると、1年生を筆頭にベンチ組がタオルを入れたカゴを持って売り歩き始めた。
体育館の向こうではお兄ちゃんと賢太もカゴを持って売り歩いている。
すごい体力だなぁ。
でも2人目当てらしいギャラリーがたくさん買ってくれてるみたいだし、売上貢献のためには働くしかないのか？
「ウソ！この銀行でもらえる粗品みたいなタオルが３０００円ってありえないでしょ。ゼロ1個消しても高いくらいじゃない！」
山下さんが高田くんに、悪徳商法だ訴えてやる、と息巻くくらいの残念な品だからね。
正直、買うか買わないかは売り手の技量ひとつみたいなところがある。
「高田くんじゃなくて佐倉先輩か高橋先輩が売りに来てくれたら考えても良いんだけどねー」
中山さんがいうと、早川さんと荒井さんも声を揃えて「ねー」と同意している。
このタオル、現役部員にはノルマが課せられていて、たしか三万円

分売らないと残りは買い取りなんだよね。
お兄ちゃんも賢太もいつもノルマ以上を売ってたから、うちは手出ししたことないんだけど、部員のなかには企業まわりをして買ってもらったり、親戚に買ってもらったりってしてた人もたくさんいたはずだ。
高田くんのカゴの中には、…まだ7本も残ってる。
これって親とじいちゃんばあちゃんの分を除けただけなんじゃないの？と呟いたら顔が赤くなった。図星か。
はぁ。
「1本買ったげる」
これで高田くんに関する私の後ろ暗いなんだかんだはチャラだ。
「お前なに遥に買わしてんだアホ」とわざわざ文句をつけにきたお兄ちゃんのカゴに残りのタオルを移し替えて、と。
「うわ、遥なにしてんだ」
「私設諜報員は大事にしないとね」と黒い笑顔を向けて囁くと、お兄ちゃんはおとなしくなりました。
結果、斉藤さん、早川さん、荒井さん、中山さん、山下さんと、なんかたまたまお兄ちゃんと目が合ってしまった女の子があっさりと買ってくれたので、高田くんのタオルは瞬く間に売り切れました。
めでたしめでたし。

試合は現役チームが逆転勝利を収め、気を良くした先生と保護者ギャラリーがおひねりとばかりにタオルを買って帰って行った。
なんかちょっと後半出来レース臭かったけど良い試合でした。

１６。本音と建前

髪をほどいて洗ってもらったら、髪が腰の下まで伸びていて、鏡越しに美容師のお兄さんが驚いた。
「うわー、ずいぶん伸ばしたねー」
「伸ばそうと思ってたわけじゃないんですけど、お兄ちゃんが切ってくれないんでほったらかしなんです」
長くても三つ編みにしてるからあんまり気にならないし。
「お兄ちゃんが切ってくれるの？すごい妹思いのお兄ちゃんだねー。いまどきそんなに仲の良い兄妹も珍しくない？」
「うーん、それはそうなんですけど、たぶんお兄ちゃんの本当の狙いは困ったときのお小遣稼ぎなので。他でそれなりに潤ってると全然切ってくれないし、そのくせ私が美容院とかに行くようになったら稼ぎ口がひとつなくなると思って行かせてくれないし」
「はー、おもしろいお兄ちゃんだねー」
「迷惑ですよ。基本すっごく可愛がってくれる甘いお兄ちゃんなんですけど、一方ですごく都合良く利用されてる事とかもあって」
「えー、なになに例えば？」
「例えば昔からなんですけど、友達と遊びに行くときにわざわざ私を連れて行くことで親からお小遣をもらったりもするんですよ。…でも４つも年下の、しかも女の子連れて遊びに行ってもつまんないに決まってるじゃないですか。それで今度は友達を納得させるために言葉巧みに吹き込むんですよ。うちの妹は可愛くて賢くて性格も良くてオススメだ、将来お前らが結婚したら俺たちは義兄弟としてずっと仲良くやっていける、俺はホントはかわいい妹を誰にもやりたくないけどお前だけは特別だ、だって親友だからな、とかなんとか。で、ついでに真に受けた友達に私の世話のめんどくさいとこを全部押し付けちゃうんです」
「うわー、すごいねー」

「私にも、あいつは遥を気に入ってるから自ら進んでそうしてくれるんだ、ってマズイことを言い付けられないように念押ししたり。お兄ちゃんなのであれですけど、他人だったらすごい邪悪な人なんじゃないかと思います」
「あはははは。でもじゃあ髪いじったって分かんないように長さはかえないで、なかを軽くしてガイジンみたいな柔らかさを出すのにしようか。…でもそれでホントに恋がうまれて結婚したら、すごい先見の明がある人ってことになるよね」
「…私も小さい時は良いように洗脳されてて、夫婦の年の差が４歳って理想的だわ、とか思ってたんですけど、いざ年頃になってちらっと意識してみると、思春期の４歳ってすごい年齢差だなって。向こうが大学生になってもこちらはまだ中学生ですもん。ちょっとあれこれ考え難いですよね」
「えー、でもそれは遥ちゃんの意見であって、相手はどう思ってるか分からないんじゃない？僕からしたら、遥ちゃんは実際すごいかわいいと思うけど？」
「…。ちょっと前に、向こうもちらっと意識してくれてるのかな～？って感じたことがあったんですけど、そのあとずーっと眉間にシワよせて困った顔してて。下手に小さいころから見てると余計に難しいんだと思います。ほんの何ヶ月か前まで毎日ランドセル担いでる姿を見てるわけですし。たぶん、自分に対しての嫌悪感とか私に対しての罪悪感とかが善良な彼の心を蝕んでいるのかと。…ホントは全部お兄ちゃんのせいだと思うんですけど、いまさら十年来の親友の暗黒面を見せるのもどうかと思ったり、私も善良な彼が邪悪なお兄ちゃんに愛想を尽かせたらイロイロ嫌だなと思ったりで」
つい気付いてないフリをしてしまうんです。とそこまで話したところで、「終わったよー」と先輩がやってきた。
「こっちも終わりました。…すっごくかわいくて良いカンジになりましたねー」
ケープを外してすかさず褒めを入れる美容師さんってプロだなぁ。

「うわー、ホントだー。すっごくかわいいねっ」
とすかさず同意する先輩は天然ジゴロだな。
「どうもありがとうございました。とっても素敵にしていただきました」
とお辞儀すると、「いえいえ、こちらこそ楽しかったです。また優也くんの撮影の時に整えてあげるから一緒においでねー」と言ってくれた。

ここは角谷先輩のお祖母さんがいくつか経営している美容院の1店舗で、角谷先輩は小さい頃からヘアメイクモデルの撮影時にモデルをしているそうだ。
とは行っても男子学生なので、自身がモデルになるというより某テレビ雑誌のレモンのようなカンジでそこにいるだけらしい。
今日も綺麗な顔を下に向けたままずっと携帯ゲームでRPGしてた。
「結局のところ、おばあちゃんが僕にお小遣をくれてるだけなんだと思うんだけど、僕もおばあちゃんにお小遣もらいに行ってくるって言うより、おばあちゃんに頼まれたからバイトに行ってくるって言うほうがなにかと都合が良くて」
つい気付いてないフリしちゃうんだよねー。お小遣欲しいし。と言う先輩にドキッとしてたら、「ところで遥ちゃんが素敵っていう時の口の動きってセクシーだね」という先輩にキスされた。

17。所有権の主張

最近、お昼を一緒に食べる人の人数がやたら多い。
もうみんながおもしろがるようなネタはないか出さないかなので、集まる必要ないと思うんですけど？
女子だけでなく男子も混ざって、毎日が遠足か合コンか、というカンジ。
円陣組んで食べたりしてやたら場所を取るので、晴れた日は中庭で食べるようになった。
「ところで高田くんはなんで私の隣に座ってるの？」
「イイじゃん。友達だろ？」
「お兄ちゃんのスパイとは友達になりません」
「がーん」
食後はてんでんばらばらにおしゃべりしたりしつつ、お菓子やなんかをまわして食べたりするんだけど。
…。
なんだあれ。
私は、早川さんがカバンから取り出した缶ジュースにくぎづけになった。
そこには、プリンジュース～カラメルの風味リッチバージョン～と書かれていた。
「なんだあれ」
高田くんが言った。
「プリンジュース～カラメルの風味リッチバージョン～って読めたけど」
「それって美味いのか？」
「高田くんはくるくるぱーだな。美味しい可能性はゼロに決まってるじゃない。でもきっと高田くんの求める友情の味がするのでまわってきたらじっくりと味わってみてください」

…と言っている間にそのジュースは私のところにまわってきた。
…。
うわー、な味がする。
「甘ったるいカラメルとミルクセーキとバニラな味が素晴らしく嫌なバランスで味わえるよ？」
と言いながら高田くんにまわそうとしたとき、私と高田くんの顔の間に、す、と腕が入ってきた。
そのまま私の手から缶を取り上げひとくち飲むと、「ああホントだね」と言ってから、にっこり笑って「はい」と高田くんに缶を渡して、角谷先輩はどこかに行ってしまった。
…。
いまどこからわいてでたんだあのヒト？
…なんだかビミョーな空気の中、高田くんは手の中の缶をじっと見つめた。
なんだったんだ今の？
所有権の主張、というフレーズが一瞬心に浮かんだけど、いや私モノじゃないし、と自分自身に突っ込んだ。
「やっぱりお前と角谷先輩って」
「付き合ってません」
それよりさっさと飲め。
プリンジュースをひとくち口に含んだとたん、分かりやすく「うぬおぅっ」と悶絶した高田くんのおかげで、いくらか場の空気が和やかに戻った。
…。
ひょっとしたらあの人は私が思ってるよりも私のことが好きなのか？

…。

イタイ。

心臓がイタイ心臓がイタイ心臓がイタイ。

「おい、佐倉どうした？！」

身体を２つ折りにして苦しんでいる私を気遣う高田くんに「プリンジュースの呪いが…」と呟くと、ものすごい引いた口調で「俺の横で吐き戻さないでね」とお願いされてしまった。

くそぅ。

高田くんはプリンジュースの海で溺れ死にしたら良いと思います。

１８。賢太からの告白

合気道という武道は、スポーツとしていわゆる人気競技ではない。
でも、うちではお父さんもお兄ちゃんも賢太も合気道をやっている。
個人タクシーの運転手をしているうちのお父さんは護衛をつけているような要人の送迎をすることもあるんだけど、そんな時にもお父さんには護衛なんてつかないのでお父さんは自分で自分を守らなくてはならない。
そこで、護身術として選んだのが合気道。
水と安全には恵まれている日本なので実際に危ない事に巻き込まれたことはない、とのことだけど、合気道の有段者です、というのはひとつの売りになるらしく、それを理由にお父さんを指名する人も多い。
おかげでうちの家計は個人事業者としては安定していてありがたい限りです。
ただ、不人気競技の共通した悩みとして、やっぱり道場には予算も人手も足りていない。
時々、お兄ちゃんと賢太がボランティアで小学生以下の子供達を教えに行ったりしているのが効を奏したのか、ちびっ子会員は数を増やしつつあるみたいだけどたいした収入源にはならず、むしろ人手は足りなくなるばかりで…。
お兄ちゃん達が地元で大学に進学してくれれば、アルバイトとして正式に雇い入れて女性向けの護身術クラスをつくるつもりらしいんだけど。
２人を餌に収入アップを目指すという、プライドもへったくれもない分かりやすい計画を聞いたとき、いやほどこの道場の貧窮具合を実感した。
しかしいくら貧窮しているとはいえ、ちびっ子会員が多くなると無

理をしてでもやらなくてはいけないことがある。
ズバリ発表会だ。
ちびっ子会員の会員料を払っているのは親御さんなので、会員本人が道場に来て終わりというわけにはいかない。
ほーらちびっ子たちみんな頑張ってますよー的なアピールを怠っては、いつ退会してしまうやも分からない。
企業努力というのは、大企業ならずともせねばならないことなのだ。
個人タクシーの運転手も。
町の小さな合気道道場も。

でも人手が足りないのは努力ではどうにもならないので、そこは助け合いの精神でカバー。
お父さんもお兄ちゃんも賢太も、今日は裏方仕事やらデモンストレーションの模範演技やらちびっ子たちのお世話やらと、息つく暇もない。
さっきまでちびっ子たちのトイレタイムで右往左往していたと思ったのに、今度は2人で模範演技を披露するために準備をしている。

まずは2人並んで基本の演舞から。
実はこれと全く同じ演舞をついさっきちびっ子たちが披露している。
同じ演舞でも十年のキャリアで見栄えの良さは雲泥の差ほど違う。
ましてもともと悪くない姿形をしているお兄ちゃん達なので、会場のお母さん達から感嘆の溜息が出るのも当然のことだ。
ぜひこの姿を目指してちびっ子たちを末永く通わせて下さいね！という師範の心の叫びが聞こえてきそうな気がします。
続いて組み手。
先程よりはかなり速く、けれど隅々まで美しく見えるように長い手足を操って息の合った演技が披露されると、会場がこれ以上ないほど静かになった。
いつも騒がしいちびっ子たちですら夢中になっている。

最後に、賢太に比べると線が細く背の低いお兄ちゃんが賢太の拳をとり、投げる。
もちろんデモンストレーションなので実戦の投げ技とは違い、賢太自身の協力のもと空中で大きく円を描くように投げ技の美しさを見せるのだか、ごつい賢太が体重をなくしたようにふわりと投げられる様は、そのことを知っているはずの人たちからも「おおー」と声を上げさせた。
小さな音だけで受け身した賢太が何事もなかったように立ち上がり、お兄ちゃんと並んで一礼すると、会場中から拍手がまきおこった。

もうほとんどのプログラムを消化したところで、今日のお兄ちゃんは珍しくよく働いてるなあと思ったら、賢太がいなかった。
…なにかあったのかな？
「賢太がいない」
「…あら、本当ね。孝明ならともかく。なにかあったのかもしれないから、あなたちょっと後ろ見てきたら？」
お母さんに促されて、道場の後ろにある師範の家を見に行くと、賢太はダイニングの椅子に座ってテーブルに突っ伏していた。
「賢太？」
「ああ、遥」
「具合悪いの？」
「んー、ちょっと寝不足？さっきの模範演技でグラっときたからサボってる。どうせもうすぐ終わりだしたまには孝明に押し付けとけと思って」
「そっか。…あったかいお茶でもいれようか？」
「いや、良い。大丈夫」
向かい側に腰掛けると、「あのさ」と賢太が言った。

「俺ね、遥のこと好きだよ」

19。大切な人だから

「俺ね、遥のこと好きだよ」
賢太は静かな声で言った。

「大好きな孝明の妹だからじゃなくて、俺が、遥を好きなんだ。たぶん、孝明やおじさんに負けないくらい。でも俺は他人でしょ？そろそろ遥に彼氏でもできたら遥の人生から締め出される気がしてたんだけど、最近高田のこととかイロイロあって本気で実感した。遥は孝明の妹でおじさんの娘で、でも俺は他人だから遥にそういう相手ができたら優先順位はそっちが上なんだって。…ずるいよね。俺、ぶっちゃけ孝明よりよっぽど遥を大事にしてる自信あるのに。…ホントはさ、他の男にとられるくらいなら、むかし孝明が言ってたみたいにいっそ遥を俺のにしちゃえば良いんじゃないの、とかエグイことを考えたこともあって。まあ年齢差のことはのちのち気にならなくなるだろうし、どうせなら遥があんまりそういうのわかんないうちに、とかけっこうリアルに想像したりして。俺男だし、最初さほど気持ちがともなわなくてもある程度かわいい女の子なら全然ヘイキで付き合えるし、客観的に見ても遥は実際かわいいからさ」
…でも。
「でも、遥は俺にとってホントに大切な女の子だから」
ムリ。
と呟くように賢太は言った。
なんだかものすごく感動して、なんだかものすごく嬉しくて。
「遥も。遥も賢太が大好きだから、もし賢太とそういう関係になるときにはきっと本当に本当に本気なときしかダメだと思う。…だって、すごく大切な人だから」
本当に本当に本当に大切な人だから。
「あと、賢太に彼女が出来たら会えなくなるかもしれないからイヤ

だ、って遥も思ったことある。本当に賢太が好きな人ならしかたないかもしれないけど、そんなでもない人に遥とのことあれこれ言われたらヤだなぁって。遥から賢太を取り上げないで下さいってお祈りしたことだってあるよ？」
なんかいますごい萌えっとくること言ったな、と賢太が笑った。
「俺、遥に彼氏ができたら孝明どころでなくそいつをイジメると思う」
「遥は賢太の彼女に、そこ私のポジションなんですけど、って言うと思う」
「こわ」
ミニ孝明だ、と賢太が言ったとき、「…なんだお前ら仲良しだな」と本人が現れた。
「もう閉会の挨拶だから、大丈夫そうなら呼んでこいって言われてきたんだけど」
「ああ、行く行く。悪かったな働かなくて」
「めったにないことだし別にかまわないよ。しかしたまにこういうことがあるとお前の偉大さとありがたみが身に染みるわー」
「…お前やっぱり良いヤツだな」
いやそこはちょっとどうかな…。と思ったものの、口に出すとお兄ちゃんがせっかくの感動をだいなしにするような邪悪なことをしでかしそうな気がしたので黙っていた。

20。そろそろキャパオーバーかもしれない

「星野が角谷に告白したんだよ」
何故か、私を責める口調で言われた。
「…はぁ」
「私ら3年は一学期が終わったら吹奏楽部を引退になってもう会えなくなるから。でもこれからも一緒に居たいから。そう言って告白したのに。振られたんだって！」
…なんで私が奥田先輩に怒られるのでしょうか？
あれ？でも角谷先輩って来るもの拒まずなのに。
「え？なんで」
「佐倉が好きだって言ってたんだって！」
…。
…。
…。
は？
「は？」
ウソでしょ？
「なにかの間違いじゃないですか？」
「星野が私に電話で言ってたんだから間違いないわよ！」
なんで？
なんでなんでなんで？
…。
それは星野先輩に比べると比較的私のほうが好きとかそういうことじゃないですか？…とか聞いたら殴られそうで怖くて聞けないけど、でもそういうことなんじゃないだろうか？
「…どうすんの？」
「え？は？」
「どうすんのって聞いてるのよ！言っとくけど断ったら許さないか

らね。そんなの星野が報われなさすぎる。ちゃんと付き合いなさいよ。星野はね、それが角谷の幸せならそのほうが良いって泣いてたんだからね！」

…。

奥田先輩の星野先輩へ向けた友情は素晴らしいと思うんですけど、その優しさといたわりをほんの少しで良いので私にも分け与えるわけにいかないでしょうか？

「私は、角谷先輩に告白された覚えもなければ、告白される予定もないんですけど」

不機嫌な声は出さないように気をつけたつもりだけど、正直、不愉快。

なんでホントかどうかも分からない角谷先輩の気持ちを人から一方的に伝えられて返事までしないといけないの？

それっておかしくない？

百歩（もしくは百万歩）譲って星野先輩と角谷先輩とのあれこれに奥田先輩が首を突っ込むのは星野先輩が引き込んだようなものだからしかたないとしても、なんでそこに私まで巻き込むの？

もしくは、角谷先輩と私の間のこと（そんなことが存在するかも疑問だけど）に奥田先輩が介入するの？

…うんざりする。

「もう昼休みも終わりなので教室に戻ります」

失礼します、と言い捨てて音楽室を出ると廊下に高田くんが居た。

今日もスパイ活動に忙しいみたいだね、とこちらは不機嫌を隠すことなく厭味たっぷりに言ってやったら、少し傷ついたような顔して

「佐倉先輩も俺も、お前のこと心配してるのに」とすねたように言われた。

呆れた。

「余計なお世話です」

「でも、これからどうすんの？」

「どうもしない」

「え？でも」
「なにも聞いてないことにするからどうもしない」
ついでに今日から部活はしばらく休みます。
「かかわりあいになりたくない」と言ったら、思い切り引いた口調で「そういうシビアなところで兄妹だなって実感する。佐倉家こわいよね」と言われた。
失礼な。
ほっといて欲しいだけなのに。

角谷先輩に「しばらく部活に行けなくなりました。帰りはひとりで帰ります」と言うと、先輩の返事は「そう」だけだった。

朝はあいかわらず一緒に登校している。
部活を休む理由は聞かれない。

奥田先輩が言っていたようなことも言われない。

時々、心臓がイタイと思う。

先輩にキスされると心臓がイタイので、よける。

先輩に見つめられると心臓がイタイので、さける。

先輩に会うと心臓がイタイので、もう会わないほうが良いと思う。

「今度から朝もひとりで登校します」というと、先輩の返事は「そう」だけだった。

…。

心臓がイタイ。

心臓がイタイ心臓がイタイ心臓がイタイ。

21。キャパオーバーです。

部活をサボって家に帰っているというところをつつかれたくなくて、話し掛ける隙をあたえないように一心不乱に勉強したりピアノを弾いたりしていたら、期末テストの成績がぐっと上がり、ピアノでは先生に褒められた。

「最近の佐倉さんは、とっても前向きにピアノに取り組んでるよね」前向き、という言葉が心に重たく感じます…。

「角谷くんも」と先生が先輩の名前を口にした瞬間、心臓を掴まれたみたいな気がした。

カドタニクンモスゴクネッシンダシ。

「これなら今度のコンクールは期待できそう」

「…先生。コンクールは年末からですよね。それはずいぶん気の早い話だと思いますけど」

「そうでもないわよ。せっかくだからソロと連弾の2部門にエントリーしたらどうかと思ってるの。予選は5分以内の自由曲を1曲ずつだけど、本線になれば課題曲もあるし、少なくとも選曲は早いほうが良いと思うわ。選曲しだいで準備の内容もまた違ってくるし、ね？」

連弾、と聞いたら初めて先輩と一緒にピアノを弾いたときのことを思い出した。

連弾なんて立派なものじゃなくて、まんま同じ楽譜をせーので弾いただけだったけど、私はすごく楽しくて、それから先輩も楽しそうで、ピアノまで笑ってるみたいな幸せな気持ちになったときのこと。

なんだか無性に切なくて苦しくて先輩に逢いたいと思った。

でも会いたくない。
だから、会わない。
…と思ったのに。

私の後ろのドアがノックされた時、ものすごーく嫌な予感がしました。
「だから2人で一緒に弾いたときのカンジを知りたくて、佐倉さんのレッスン終わりの時間にあわせて来てくれるように角谷くんに頼んでおいたの。どうぞ入って」
「失礼します」
声を聞いただけで心臓が止まりそうになって、びくん、と肩が跳ねた。
嬉しそうに「簡単な連弾の楽譜をいくつか用意しておいたから」と先生が言っているのが、どこかものすごい遠くで聞こえた気がした。
そーっとワックスの効いたピアノ越しに先輩を盗み見るものの普段ととくにかわった様子はなく、嬉しいようながっかりするような。
いや、ここは喜ぶべきだから。
とにかく、いまはいまを乗り切ることに全力を尽くそう。
私には何もやましいことはない。
私には何もやましいことはない。
私には何もやましいことはない。
…よし！

先生が用意してくれた楽譜は1曲2分ほどの小さい子供向けの練習曲ばかりだったので、演奏自体は初見でもとくに問題はなかった。
先生の指示に従ってパートを交代したり、弾きかたを変えて試したり。

1曲、主旋律を弾く私を先輩の右手と左手で挟むようにして弾く曲があって、その曲を弾くためにはなるべく身体を寄せ合って先輩の右手を私の背中越しに伸ばして弾かないといけなくて、その2分間を乗り切った時には、自分で自分を褒めてあげたいと思いました。
満足気な先生の「うん、なんだかイメージが掴めてきたわ。次までに2～3曲選んでおくから、夏休み中にそれで試してみて、それから1曲に絞るかまた別の曲に替えるかしましょう」という言葉でレッスンが終わったときには、心の中でガッツポーズをした。
あー疲れた。
さっさと帰って休もう。

先生がいなくなったレッスン室からできる限りのスピードで逃げだそうとしたのに、先輩に話しかけられてしまった。
「遥ちゃんは僕のことを避けてるの？」
当たり。
「なんのことですか？」
先輩の真似をして小鳥のように首を傾けて言うと、「ま、良いけど」と言われた。
良いんだ、とひそかに傷ついていたせいで先輩の目が座っていることに気が付かなかった。
気が付いた時には腰に手をまわされて身体全体を密着させるように壁に押さえ付けられていた。
無造作に髪を掴まれて顔を先輩に向けさせられる。
先輩が無表情に激怒していた。
やばい。
「人に見られてめんどくさいことになりたくないって言いましたよね」
「遥ちゃんの言うこと聞いても良いことないからもう言うことときかない」
唇が触れるギリギリの距離でしゃべるから何度かおでこに先輩の唇

がかすった。その度に背骨に沿って電気が走る。
やばい。
とっさに顔を背けて横を向いたけど、あんまり状況が良くなったカンジはしなかった。
むしろ、先輩がより怒った気がする。
やばい。ホントにやばい。
なんとかしろ私！
「私の、部屋で、家で話しませんか？…逃げたりしませんから」
直接耳に吹き込むみたいに「…そうだね。部屋で続きをしようか」
と低く囁かれて、腰が抜けるっていうことがどういうことか、すっごくよく分かった。

22。孤軍奮闘

とうとうここまで来てしまったか…。
…何日もの間、おもに「角谷」から始まる様々なめんどくさいことから私を守ってくれていた自分の部屋のドアを、こんなに憂鬱な気分で見る日が来るとは思わなかった。
内開きの部屋のドアを開けて、横にずれる。
「どうぞ」
先輩が中に入ってから「飲み物でも持ってきますから待ってて下さい」と言ってドアを閉めようとすると先輩にドアを掴んで止められた。
「また逃げるつもり？」
冷たい眼差しを向けられて、背中がビクッと反応した。

ここに来るまでにダッシュで逃げようとして失敗したり、はぐれたふりして逃げようとして失敗したり、用事を思い出したふりして逃げようとして失敗したりしたあれやこれやのことを言っているらしい。
…けっきょく全部失敗したんだから許してほしいと思う。
最後に仮病を試そうとした時にうずくまる私の耳元で「そんなに具合が悪いんなら抱いて連れて帰ろうか？」と囁いた先輩の恐ろしかったこと…！

「逃げたりしませんよ？」
ええ、逃げたりしません。
…ただもう少し時間稼ぎをしたいと思っているだけ、という心の声が聞こえたかのように先輩の目がすぅっと細くなると、腕を掴んで部屋に引きずり込まれた。
そのまま抱き寄せられて先輩が静かに閉めたドアに背中を押し付け

られた。
髪を掴んで顔を先輩に向くようにさせられる。
記憶によると先程のレッスン室でのこととさほどかわりがないように思えますが、私の背中がドアに蓋をしていることと、先輩の怒りが増していることにより、事態は悪化していると思って間違いありません。
佐倉遥は死にました。

…。

きゅっと目をつむって制裁を待ったけど、なかなか何もおこらない。
そぉっと目を開けると、先輩がすごく悲しそうな顔をして私を見つめていた。
「せんぱい…？」

…。

ひょっとしたら、私は私が思っている以上に先輩に悪いことをしたのかもしれない。と思う。

「…ごめんなさい」
謝って、それからちょっとどうしようかと思ったけど自分から先輩にくっついてすりすりしてみた。
これ、お兄ちゃんや賢太にはすっごく効くんですけどどうでしょうね？
そのままじぃっとおとなしくして待っていたら、ふぅ、と小さな溜息をついて力をゆるめてくれた。
…効いた！くっつきすりすりすげえ。
「遥ちゃん、僕のこと避けてたよね？」
こくん、と頷いて、「ごめんなさい」ともう1度小さな声で言った。

「どうして避けてたの？」
それは私なりにはイロイロあった結果なんですが、言ってはいけないかもしれない情報が含まれているうえきちんとした文章で説明するにはあまりに支離滅裂なカンジなので言葉にしづらいなぁ、と…。
ちらっと目だけで先輩の様子を見ると、もうあんまり怒ってる気がしなかったので。
「えっと。…内緒？」
ごまかしてみました。
ついでに返事に困った時には笑ってごまかせ、というお兄ちゃんのアドバイスを実践してみよう。

えへら。

…いまの笑顔すごいマヌケ面になったっぽい。
…。

でも先輩は「もうっ」とか言ってぎゅうっと抱きしめてくれた。
…効いた！絶対ムリくさいと思ったのにお兄ちゃんすげえ。
「僕のことが嫌いになったとかではないんだね？」
うん。うんうんうん。
こくこくと頷いて、念のため駄目押しのくっつきすりすりも追加してみました。
「…じゃあ良いや」
…逃げ切った！私すげえ。
いっさい都合の悪いことを言わないで逃げ切った私を自分で褒めちぎりたいと思います。
「キスしても良い？」
…それはちょっとどうでしょうか？
「…いや？」
いやというかなんというか。

「健康に良くないみたいなのでどうかな、と思って」

先輩は、「しないほうが僕の健康には良くないみたいだよ」と言ってキスをした。

23。空に輝く星

夏休みに入り、ピアノ教室では私と先輩の合同練習が始まった。
先生が用意した楽譜は3曲で、私が高音パートで先輩が低音パートの曲がふたつ、そして主旋律を弾く私を先輩の右手と左手で挟み込むようにして弾かないといけない曲がひとつ。
両方のパートにト音記号とヘ音記号があるのを見て、私はこの曲を暗譜しないことにした。

ピアノ教室からの帰り道、先輩から唐突に「星の王子様って読んだことある？」と聞かれた。
「ありますけど？」
「遥ちゃんといると、星の王子様の気持ちがすっごく理解できる。あんまり意地悪されるとどっか遠くで死なないといけないかもしれない」
なんだそれ。
「先輩は王子様にピッタリですけど、私はあの話のなかではキツネが1番好きです。どちらかというとバラはスピリチアルビューティな先輩のお母さんかと思いますし。…たとえ問題行動があったとしても、産んで育ててくれて、ピアノも教えてもらって、ありがたいですよね？どちらを重要視するかは人それぞれですけど、たしか星の王子様は大きくなったなら何をしてくれていたかで品定めしなくちゃいけないみたいなことを言ってませんでしたっけ？」
私なら、ピアノ教室で親が働いていたら挨拶くらいして帰ります。
「…これから気をつけるようにする」
「そのほうが良いですね」
先輩がじぃっと私を見つめたので私はキスされるのをよけるために身構えたけど、先輩はまばたきをひとつすると不安そうに言った。
「…キツネと仲良くしたいと思ったら、時間をかけて少しずつしな

いといけないんじゃなかったっけ？」
…？
なんとなくだけど、この答えに私の今後の運命がかかっている気がする。
「…そうですよ。飼い馴らされたことがないんですから」
「うん…」
「でも上手くいけば、この世でたったひとりの、かけがえのない相手になるんです」
「うん…」
「しんぼうが大事だよ、とキツネも言っていましたね」
「うん」
にやり。
「先輩、お手々つなぎましょうか？」
先輩はしばらく途方にくれた子供のように私の差し出した手を見つめていたけれど、やがておずおずとその手を握った。

健全な中学生カップルのできあがり。やったね。

まわりがどう思うかは知らないけど、私は大切に育てられた中学1年生で、身体も心も中学1年生サイズしか持ち合わせていない。だから、ところかまわずのキスの嵐とか可愛がってくれた先輩との修羅場とか心臓が痛くなるほどの恋心とか、そういうのってまだ早いと思う。
たとえ好きでも。

でも先輩が小鳥みたいにかわいいから、私には全部の小鳥がかわいく見えるし、先輩が楽しそうにピアノを弾くから、私には全部のピアノが楽しそうに見える。

きっとこれからは、全部の星に王子様が住んでいるみたいに輝いて

見えると思う。

「僕、遥ちゃんが好きだよ」

不安そうに揺れる瞳や、小鳥みたいに傾けた首や、かすれた声を、たぶん私は一生忘れないと思う。

内緒だけど。

「先輩、仲良くしましょうね？」

にっこりと笑うと、先輩は真面目な顔で頷いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4476y/

君は僕の輝ける星。

2011年11月21日21時41分発行